

人はなぜ「移動」に駆り立てられるのか

今号の特集にあるように、自動運転やMaaSの台頭など、いま私たちの社会は「モビリティ革命」のまっただ中にあります。目的地までいかに効率的に、そして快適に移動するか。車輪の発明から、汽車、自動車、飛行機、ロケットと、人類の歴史は「移動」のためのテクノロジーの革新とともに進んできました。

しかし一歩立ち止まってみると、なぜ私たちはこれほどまでに「移動」という行為に情熱を傾け、技術を磨き続けてきたのでしょうか。それは単に利便性を追求した結果というより、そもそも私たちの遺伝子の中に、抗いがたい「移動への衝動」が刻み込まれているからなのかもしれません。ご存知のとおり人類はその発祥のときから「移動する生き物」でした。約20〜30万年前にアフリカで誕生した我々の遠い祖先は、長い間、安全な木の上に暮らしていましたが、6〜7万年程前に地上に降り立ち、猛獣に襲われる危険のあるサバンナへと出て行き、やがて広大なユーラシア大陸へと踏み出していきました。砂漠や山林を越え、海を渡り、地平線の先を目指し、今や地球上いたるところに暮らしています。近年、その「グレートジャーニー」と呼ばれる旅が、かつて考えられていたよりも、遥かに早い時期だったことがわかってきました。

その証拠の一つが、2009年、米国ニューメキシコ州のホワイトサンズ国立公園の職員が発見した「化石化した人類の足跡」です。それまでアメリカに人類が渡ったのは氷河期末期の約1万3000年前、北米とシベリアが陸でつながっていた時代にそこを渡った人々が最初であるというのが定説でした。しかし足跡の分析から、人類は約2万1000年〜2万3000年前には、すでに北米大陸に到達していたことが裏付けられたのです。氷河期で海を分厚い氷床が覆い、長距離の移動が極めて困難だろう時代に、私たちの祖先はすでに未知の大陸に足を踏み入れていたわけです。その後、ホワイトサンズ国立公園では「トラボイ」と呼ばれる原始的な「そり」の軌跡も見つかり、当時の人類が「歩く」だけでなく「物資を運搬していた」こともわかりました。

極寒の地を越え、未知の環境へと足を進めるリスクは計り知れません。食料や安全を求めるならば、住み慣れた土地にとどまるほうがリスクは低いはずです。それでも人類は移動をやめませんでした。

なぜ人はこれほどまでに移動が好きなのか、哲学者・國分功一郎氏は著書『暇と退屈の倫理学』の中で、人類の移動の歴史と「退屈」という感情について、興味深い洞察を展開しています。人間は生活環境が安定し、一定の場所にとどまる（定住する）ようになると、環境の変化が減少し、どうしても「退屈」を感じるようになる、と國分氏は述べます。退屈とは、人間にとって耐えがたい心理的負担なのです。

國分氏の論を借りれば、遊動生活を送っていた頃の人類は、つねに新たな環境に適応しなければならず、「退屈」を感じる隙などきっとなかったはずです。数万年前、人は定住によって生まれた退屈から逃れるため、あるいは新たな刺激と環境の変化を求めて、移動し続けることを選んだのではないか。移動すること、景色を変えること、未知の場所へ足を踏み入れることは、人間が内なる退屈を乗り越え、生の実感を得るための根源的な本能なのかもしれません。

移動手段が歩行から馬車へ、鉄道や自動車、そして航空機へと進化しても、根底にある衝動は同じです。移動の利便性が極限まで高まり、VRやメタバースなどのテクノロジーによって「移動しなくても体験できる」時代が訪れつつあります。しかし異国への旅のように、自らの身体をもって別の場所へ移動し、新しい風を感じる瞬間の喜びは、決して代替できません。現代におけるモビリティ革命も、私たちが本来持っている「どこかへ行きたい」「未知の世界に触れたい」という希望を、より自由なものにするための挑戦なのでしょう。

大越　裕（おおこし ゆたか）
神戸在住。理系ライター集団チーム・パスカル所属。
大学研究者や経営者のインタビュー、ルポルタージュを雑誌やウェブメディアなどに執筆。

KOBELCO | 株式会社コベルコ科研
発行
コベルコ科研・技術ノート こべるにくす　Vol.34, No.63 OCT. 2026　コベルコ科研「こべるにくす」編集委員会
本社 〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-5-1　TEL (078) 272-5915　https://www.kobelcokaken.co.jp/
「こべるにくす」は(株)コベルコ科研の登録商標です。